

---

# 正義の味方

彩月空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正義の味方

### 【Nコード】

N0237G

### 【作者名】

彩月空

### 【あらすじ】

ある日、突然届いた謎の荷物。それが1組の男女の運命を変える。果たして、それが導くエンディングとは？

「あ、こんにちは」

「こんにちはあ」

買い物帰りであろう隣人と挨拶を交わし、男は自分の部屋に入る。男もまた買い物袋を手にしてしたが、隣人の持つ袋には野菜や肉など食事を作るために買った材料が入っているのに対して、こちらの袋の中身はコンビニ弁当だ。男の一人暮らしでは自炊をする気にもならない。毎日のようにコンビニ弁当を食べているのだ。男は、ああ、とため息をついて、買ってきたばかりのコンビニ弁当を机の上に置いた。

と、部屋のチャイムが鳴った。

そして、これが全ての始まりを告げる鐘の音となった。

~~~~~

都内某所。

この日、1人の男の運命が狂うことになる。その男は突然届いた荷物に首をかしげた。

「………新手の詐欺かなんかか？」

持ち上げてみると、重量はさほどないことが分かる。しかし、何かを注文した覚えもなければ、荷送人の名前に心当たりも無い。

ひとつの手がかりとしては、その荷物ともに1枚の封筒もついてきたということだ。

男は荷物をあけてしまったら、いろいろ厄介かもしれないが、封

筒を開けるくらいなら問題ないだろうと考え、それを破った。

そして、それがさらに悩みの種をまくことになる。

「……は？」

そこには、ただ一文、こう書かれていた。

あなたは、今日から勇者になりました。

~~~~~

都内某所。

この日、1人の女の運命が狂うことになる。その女は突然届いた荷物を怪訝そうに眺めた。

「……これって、なんとか商法ってやつじゃないかしら？」

持ってみるとそれほど重くはないことが分かる。けれど、何かを注文した覚えもなかったし、親や友人から荷物を送るといった連絡もなかったはずだった。

ただこの不審物にもひとつの手がかりがあった。荷物ともに1枚の封筒もついてきたのだ。

女は荷物をあけてしまったら、クーリングオフがどうこうとかで面倒になるかもしれないが、封筒ならば開けてしまっても別に問題ないだろうと考え、糊付けされている部分をペーパーナイフで丁寧に切った。

そして、それは彼女をさらに悩ませることになる。

「……えーっと、ええ!？」

そこには、機械的な文字でこう書かれていた。

あなたは、今日から魔王になりました。

~~~~~

男、改め、勇者の家。

勇者は手紙を握ったまま固まったように動かなくなった。危うくそのままトリップしかけたが、隣の部屋から小さな叫び声が聞こえて我に返る。勇者は壁の薄いアパートのおかげで膠着状態を無事に脱した。危うくフリーズしたままスタートからやり直しになるところだった。開始早々ゲームオーバーではRPGとしては最悪だ。

「で、どういうことだ？」

勇者はそう独り言ちながら、荷物に目をやった。多分だが、これを開ければいろいろ解決するはずだ。

「あけよう、か」

そう言い聞かせながら、荷物をあける。

「んん？」

入っていたのは手紙と服、それから用途不明の野球ボールくらいのおおきさの水晶と小型ラジオのような形態の機械だった。

「勇者っぽい服だな」

勇者はそう感想を洩らしながら、服を手にとった。どこかのRPGの主人公が着ていてもおかしくないデザインだった。

「とりあえず着てみるか」

驚くべきことにサイズはぴったりで、彼は鏡に自分の姿を映してみた。

「なるほど、確かに勇者だ」

一見すると、ただのコスプレであったが、勇者はそれを気に入っ

た。

~~~~~

女、改め、魔王の家。

魔王は手紙を握りしめたまま、荷物に視線を移した。

「よく分かんないけど、興味をそえられることは確かだね」

魔王は先ほどまでの疑念を消して、湧き上がる好奇心を發揮し、荷物に近づいた。

「あけよう」

そう呟いて、荷物をあける。

「おお？」

中には手紙と衣装、それから用途不明の玉ねぎくらいの大きさの水晶と防犯ブザーのような形態の機械が入っていた。

「悪役っぽおい」

魔王は嬉しそうにそう言い、少し露出の多い衣装を手を取った。そして、きよろきよろと辺りを見渡す。

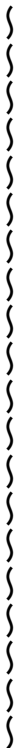
「だ、誰も見ていないし……これは着るしかないわね」

自分のスタイルにやや不安のあった魔王だが、どうやらサイズはぴったりであったらしく、彼女は胸をなでおろした。

それから鏡の前に立って何パターンかポーズをとった。魔王の格好というのが引っかかるが、それはとてもよく似合っているように思えた。

「ふはははは。貴様が勇者か」

そして、すっかり魔王になりきって、そうセリフを発した。



## 勇者宅

「で、何々？」

さて、手紙には以下のように書かれていた。

勇者様。

あなたの使命は、魔王を倒すことです。

何か武器を手に持ち、魔王を倒してください。

同封した機械は電源を入れておいてください。魔王が近くにいるとサイレンが鳴るようになっていきます。

また、水晶に関してですが、これは“ピンチを救う秘宝”です。最終決戦で使ってください。

「って言われてもな……」

勇者はため息をついて部屋を見渡した。とりあえず水晶が切り札だということとは理解した。しかし、武器をこちらで用意しろ、とはどういうことか。全く準備の悪いことだ。勇者ならば勇者らしく自分のことは自分で何とかしろってか。

勇者の部屋は6畳ほどの広さであり、家具は些細なものがあるに過ぎない。到底、武器と呼べるものなど何もないように思えた。

そして、それよりも何よりも、魔王って誰だ、という話だ。

「魔王、ねえ……」

勇者はベッドに倒れこむ。と、その反動で布団に乗っていた何

かが跳ねた。

「ん？」

勇者は視線を動かして、跳ねて床に落ちていくものを目で追う。

「ああ、そうか」

勇者は合点した。確か、気分転換と食糧確保を兼ねてコンビニに出かけるまでベッドに寄りかかって勉強していたのだ。普通の定規が見つからずに、代わりに使っていた三角定規をそのときにベッドに放り投げたことを忘れていた。

「三角定規ねえ。武器にならなくはない、か」

勇者は三角定規の先端部分を自分の額に刺してみた。勇者は軽くダメージを受けた。

「痛いけど、地味だな……」

そして、そうぼやくと、むくりと起き上がり台所に足を運んだ。

「武器つていや、やっぱ刃物……か？」

~~~~~

## 魔王宅

「うーん？」

手紙には以下のように書かれていた。

魔王様。

あなたの使命は、やってくる勇者と戦うことです。

別に勇者を倒してしまっても構いません。

同封した機械は電源を入れておいてください。勇者が近くに迫る



とサイレンが鳴るようになっていきます。

また、水晶に関してですが、これは“アクムを見せる秘宝”です。最終決戦で使ってください。

「って言われてもねえ……」

そもそも、勇者って誰よ、という話である。

「勇者かあ」

魔王は言いながらベッドに倒れこんだ。すると、枕元に座っていたぬいぐるみが反動で倒れた。

「さあ、かかってこい勇者」

魔王はぬいぐるみを掴むと、それに向かって言った。

「お前が魔王か。俺はお前を倒して世界に平和をもたらすんだ」

「勝つのは私だ。貴様を倒して、世界を暗黒の渦にうずめて」

ベッドの上に立ち、のりのりで1人2役を演じていたためだろう。「うずめて」の部分で魔王はベッドから足を踏み外した。

「きゃあー!!」

魔王は無様にもぬいぐるみを押しつぶす形で床に落ちた。ぬいぐるみに大ダメージ。

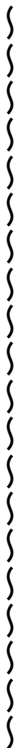
「痛いけど……わ、私の勝ちだな、勇者よ」

魔王は身体を起こししながらそう言い、はあ、とため息をついた。

「バカみたいなことやってないで、そろそろ夕食の準備をしないと……」

魔王は唐突に現実を引き戻され、台所に立つ。衣装は結構気に入っていたので、その上からエプロンを着て包丁を持った。それから妙なりズムをつけて、野菜を切り始める。

「今日のご飯はあ、今日のご飯はあ、肉じゃがあ」



## 旅立ちの章

なぜか今日は隣の部屋がいやに騒がしい。これまでも突然、自作の歌を歌いだすことはよくあったが、それにも増して今日はテンションが高いらしい。

勇者は、うん、と伸びをすると先ほど台所でチョイスした包丁を手に玄関へ向かった。

「待てよ」

そこで、足を止める。こんなものをもって外に出たら、ほぼ確実に逮捕されるのではなからうか。勇者は、うう、と唸ると、再び台所に引き返した。

「何か、こつ、持ち歩いていてもそれほど違和感がなくて、それでいて攻撃力のありそうなもの……」

勇者は戸棚を開けたり閉めたりして物色を続ける。そして、見つけた。

「うん。これならまだまし……だよな」

勇者はとある調味料のビンを手にも、外に飛び出した。

「おつと、そうだった」

そして、部屋から飛び出して扉を閉め終えてから、例の機械の電源を入れた。

~~~~~

## 出会いの章

「醤油がなあーい」

魔王は醤油が空であることに気づいたために、財布を手に外に出た。近くのコンビニに向かうのだ。先ほど肉じゃがの材料を買って戻ってきたばかりだと言うのに、二度手間になってしまった。

そして、それと同時に隣の部屋のドアが開くと音が聞こえた。確か隣に住んでいたのは優しそうな男の人だった。さつきも挨拶を交わしたばかりだ。コンビニでお弁当を買ってきたら良かった。

魔王はそんな風に男のことを思い出しながら部屋から出る。

そして、鳴り響くサイレン音と共に出会った。

財布を手に持ち、サンダルを履いたエプロン姿の魔王。

RPGからそのまま飛び出してきたのではないか、と思える衣装を着て何かのビンを手にした勇者。

「あ」「おお？」

勇者と魔王は同時に声を出した。勇者の手にある機械がけたたましい音を鳴らし続けている。双方いつまでもきよとんとしているわけではなく、勇者はサイレン音が鳴ったことと目の前の女がエプロンの下に変な衣装を着ていることを併せて、何かに気づいた。

「……もしかして、あ、あなたが、ま、魔王？」

言われた魔王は、にやりと笑うと財布を大きく振りかざして、大声を上げた。

「ふはははは。よく来たな、勇者よ」

「え、あ、はい」

そのノリにいまいち乗り切れない勇者は手に持っていたビンを背に隠した。

それに鋭く感づいた魔王は勇者が背に隠す前に、彼が手にしていたものをすばやく見盗み、にやりと笑った。

「勇者よ、今隠したものはなんだ？」

「え？ あ、えーっと、いや、これは……」

魔王を殴るために持ち出したとは言えず、勇者は焦る。まさか魔王が女だとは思っていなかった。さすがの勇者も女を殴ることに抵抗を覚える。しかも、その魔王はアパートの隣人なのだ。

まさに、灯台下暗しといったところか。おかげで捜す手間は省けたが、これではご近所関係に障る。

「隠さなくとも良い。私にはわかっておる」

魔王は、うんうんと頷きながら、財布を持っていない方の手を差し出した。

「お醤油、貸してくださいさあい」

時間が止まったかに思えわれた。ばかんと口を開けた勇者は、おずおずと家から持ち出した醤油のビンを手渡す。

「ど、どござ……」

「ありがとうございます」

魔王はお礼を言って、部屋に戻ろうとし、足を止めた。

「あ、そだ」

そして、勇者の方を振り向いて、

「お醤油を貸してくれたお礼に、ご飯食べていきますか？」

と言った。

「え？」

勇者は開いていた口をさらに開けることになった。そして、答える。

「い、ごちそうになります」

コンビニ弁当ばかりで過ごしていた勇者は、だいぶ久しぶりの手料理だな、と思いつながら、小さく頭を下げた。

「んじゃ、とりあえずそのサイレン消してください」  
勇者は慌てて、鳴りっぱなしだった機械の電源を切ったのだった。

~~~~~

## 平和なひとときの章

「これ、美味しいですね」  
「でしょう？ 実家から送られてきたんだあ。やっぱり北海の魚介類は違うと思うの」  
「全くです」

勇者と魔王は1つの机に向かい合って座り、夕食を食べていた。出会いから既に1ヶ月ほどが経過していた。これまで挨拶を交わす程度の隣人だった2人が、勇者と魔王という衝撃の出会いを通して、こうして共に食事をするまでの仲になった。

「あの、ちよつとつかがっても良いですか？」  
「はい、どうぞ」

勇者の茶碗にお代わりをつぎ、それを差し出しながら魔王はにこにこ笑う。

「今更のような気もしますが、僕たち、勇者と魔王なんですよね」  
「そうですよ」  
「戦う、とかしなくて良いんでしょうか？」  
「なるほど」

そう言って、魔王は不適に微笑んだ。

「実は、そのご飯には毒が盛ってあったのだ」  
「嘘ですよね」  
「ばれたか」

勇者は苦笑を浮かべて、ご飯をほおばった。魔王は、お皿に盛っ

たお刺身を口に運び「ん〜」と声にならない喜声を上げた。  
「ご飯が美味しい、というのは平和な証拠ですねえ」  
「そうですね」  
勇者もお刺身を食べる。確かに美味しい。  
「こんな平和なときに戦いのことを考えてはいけません」  
「分かりました」  
2人は幸福を文字通り噛み締めていた。

と、突然、どこかで聞き覚えのあるサイレン音が鳴り響いた。

~~~~~

## 決戦の章

「これは、どこかで聞いたような音ですね」  
勇者がそう言つと同時に部屋のチャイムが鳴った。  
「はあい」  
魔王が玄関に向かい、がちやりと扉をあける。そこに立っていたのは、一言で言えば、怪しいことこの上ないコスプレガールだった。  
「どちらさまでしょうか？」  
「……魔王は、あなた？」  
「はい？」  
フードのついた黒い服を着たコスプレガールは、サイレンを止めると魔王の胸倉を掴んだ。  
「あ、あの……」  
「どうかしましたか」  
騒ぎに気づいた勇者が玄関に向かう。そこでは、魔王と魔法使い

のコスプレをした女性がつかみ合っていた。

「あなた、勇者ね」

「は、はあ、そうですね……」

「何をやってるの？」

魔法使いは勇者に蔑みの視線を向けてから、冷たく言い放った。

「勇者と魔王が仲良くしているなんて、聞いたことないわ。どこの駄作RPGよ!？」

そして、服の中から古びた杖を取り出すと、呪文を唱えた。その手際の良さに、勇者と魔王はただただぽかんと口を開けるのみだった。

「へ?」「あう?」

両者が小さく漏らし、辺りは眩い光に包まれた。

~~~~~

## 別れの章

目を覚ますと、そこは惨状と化していた。

魔王は魔法攻撃により傷だらけになり、彼女を庇うようにして倒れた勇者は、ぴくりとも動かない。魔法使いは杖を振りかざしたまま、倒れた勇者をぎろりと睨んだ。

「バカか、こいつは」

そう吐き捨てるの聞いた魔王はふらふらする身体を無理やり起こして、魔法使いをにらみつけた。

「なんて、こと、す、るの？」

「は？ だって、あたし魔法使いだし。“正義の味方”だもん」  
「分からない」

魔王は倒れた勇者をゆする。反応はない。

「ねえ……ねえってば」

やはり、反応はない。魔王の瞳からこらえきれなかった涙が溢れると同時に、勇者のポケットから何かが零れ落ちた。

「まあいいわ。さっさと魔王も倒して、このゲームを終わらせようつと。これじゃあ“秘密兵器”も使う必要ないみたいだし」

魔法使いが再び呪文を唱え始める。魔王は勇者のポケットから零れ落ちた“ピンチを救う秘宝”をかざした。

そして、再び部屋一体を光が包み込んだ。

気づいたときには魔法使いは倒れ、魔王は秘宝を握り締めたまま固まっていた。

「あれ？」

何が起きたのかわからずに魔王は秘宝を見る。どうやらこれがピンチを救ってくれたらしい。なるほど。勇者の秘宝は、最終決戦で追い詰められたときに“魔王”に対して使うはずだった秘密兵器だったのだ。

役目を果たしたのか、水晶は音もなく割れた。

「勝った」

魔王はガッツポーズを作って倒れている勇者に近づく。魔法使いが最期に放った魔法を完全には防ぎきれなかったらしく、身体中が痛かった。

「勝った。勝ったよ」

返事は、ない。



「……………」  
魔王は歯を食いしばってテレビの上に視線を向けた。いや、魔法使いの攻撃で、そこには既にテレビなどなかったが、ついさっきまであったテレビの上に、自らの水晶“アクムを見せる秘宝”を置いておいたのだ。

「あれは、どんな効果があるんだろう」

魔王は考える。勇者の秘宝が魔王を倒すためであったとしたら、魔王の秘宝は何に役立つのか。勇者と同じように、ただ攻撃を与えるだけの効果であるとは思えない。ならば。

「うん。信じよう」

魔王は、とある結論を胸に、ずるり、ずるり、と身体を這わせながらテレビがあった場所に近づき、落ちていた水晶を握る。

「お願いします。これを、私ではなく彼のために……………」

魔王は信じたのだ。

この“アクムを見せる秘宝”とは、多分、死者を生き返らせる秘宝なのではなからうかと。つまり、一度倒したと思ったはずの魔王がもう一度蘇り、勇者たちに悪夢を見せる、というありがちなパターンを生み出す秘宝なのではなからうかと考え、それを信じたのだ。

~~~~~

## 旅の終わりの章

果たして、魔王の願いは叶った。

勇者が目を覚まし、むくりと起き上がったのだ。それを見て魔王は安堵したのか、身体中から力が抜けるのを感じた。魔王の手から

離れた水晶が床の上で静かに割れる。

「あれ？ 僕は、どうして……」

勇者は起き上がって、傷だらけの魔王を目に留めると慌てて駆け寄ってきた。

「どうしたんですか。その怪我は？」

「生きてて、良かった」

魔王はそう言って、微笑む。

「え？ 何を……」

勇者は自分が“死ぬ”前に見た光景と倒れている魔法使い、それから苦しそうに笑う魔王、さらに割れた2つの水晶を見て、全てを理解した。

「こんなことって……」

「そんな顔、しないでください」

勇者の腕の中で魔王は口を開く。

「そんな顔って、どんなのですか？」

「そんな顔、です」

魔王はゆっくりと勇者の顔を指差した。勇者は情けなく顔を歪めると、何かを思いついたのか慌てて魔法使いに近づいた。

「ちよ、ちよっと待っててください」

勇者は思った。勇者と魔王には各自1つずつ何とかの秘宝という水晶が与えられていた。ならば。

「あるはず……あるはずだっ！」

勇者は、とある信念を胸に、魔法使いの荷物をあさった。そして、見つけた。見覚えのある機械と水晶。それから、1枚の手紙を。手紙には以下のように書かれていた。

魔法使い様。

あなたの使命は、勇者と共に魔王を倒すことです。

衣装と共に用意した杖を駆使して、勇者をサポートしてあげてください。

同封した機械は電源を入れておいてください。魔王が近くにいるとサイレンが鳴るようになっていきます。

また、水晶に関してですが、これは“キセキを起こす秘宝”です。最終決戦でMPが切れてしまったときに使ってください。

「お願いします。これを、僕ではなく彼女のために……」

勇者は信じたのだ。

この“キセキを起こす秘宝”とは、多分力を回復させる秘宝なのではなからうか、と。魔法使いといえば、回復魔法が必須だ。これは魔王との最終決戦でMPも使い尽くし、勇者もぼろぼろ。そんな風になりながらも何とか辛勝したというのに、魔王がまさかの復活という悪夢のような展開を見せられたときに、勇者と魔法使いというパーティのHP・MPを全回復させるという奇跡を起こす秘法なのではなからうか、と考え、それを信じたのだ。

果たして、勇者の願いは叶った。

HP・MPの回復という次元ではなかった。先刻の戦いで崩壊した部屋も元通りになったのだ。魔法使いの姿も跡形もなく消え、まさに元通りになった。

「……さすが、奇跡と自ら名乗るだけはありませんね」

勇者の手の中で水晶が割れる。かけらは床に落ちる前に、すーつと消えた。

「あれ？ 私、生きてる？」

傷だらけだった魔王は、そう言いながら起き上がった。

「はい。全て、解決しました」

「そっか」

魔王は小さく笑って、それから机の上を見て首をかしげた。

「んん？ 私のお魚さんたちがいなあい」

「え？ あれ、本当ですね」

どうやら奇跡の力も万能ではないらしく、料理まで元に戻すことはできなかったらしい。

「んもう……。せっかく、美味しく食べてたのに」

「仕方ありませんよ」

さつきまで死に掛けていたとは思えない魔王の暢気さに勇者は癒される。

「じゃあ、何か作るよ」

「え？」

「何が良い？」

魔王に問われ、勇者は、うっん、と唸る。そして、あの料理が頭に浮かび、声を上げた。

「肉じゃがをお願いします。魔王様」

それは、勇者が初めて食べた魔王の手料理だった。

その返事を聞いて魔王は嬉しそうに笑い、恭しく頭を下げた。

「かしこまりました。勇者様」

かくして、男と女の元に平和が訪れたのだった。

了。

(後書き)

若干、厨臭くなった気がしないでもないですが(特に水晶のネーミングセンスが……)

設定が既にそんな感じなので、もっと突き抜けてもよかったです、と思います。

当初はバッドエンドになる予定でした。

バッドエンドと言いますか、「魔法使い」は「新勇者」として登場し、「勇者(男)」は「旧勇者」と名を変えて殺され「魔王」は怒りのあまり「新勇者」に掴みかかるが、怪我の影響が大きく魔王もまた……。

かくして「新勇者」の手によって平和は守られた。

しかし、本当に「新勇者」が正義の味方といえるのか……。という感じのエンディングを想定していました。

が。書いている途中で「魔王」に愛着が湧いてしましまして、この子を悲しませてはいけない、と思い、こんなエンドになりました。

どっちが良かったかは分かりません。

あ、ちなみに、この作品は、1月25日にブログで書いた「三題噺(灯台・定規・料理)」(<http://hungry1spice.blog25.fc2.com/blog-entry-26.html>)から派生した作品になっております。

制限時間50分で書いた場合、どんな出来になっていたかが気になる方は、ぜひ上記URLへ。

と、こんな拙作の上に、あとがきも長々と書いてしまいました。が、最後まで読んでいただきまして本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0237g/>

---

正義の味方

2010年10月8日15時08分発行